

3月2日(土)

令和六年度 B日程入学試験問題

文学部（日本文学科・中国文学科・外国語文化学科・哲学科）、  
神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、  
観光まちづくり学部

現代文

—注意事項—

- 2 1 問題は1ページから30ページ、解答用紙は一枚である。  
次の指示にしたがうこと。  
文学部は**1**・**2**を解答すること。  
神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は**1**・**3**を解答すること。
- 4 3 解答はすべて別紙解答用紙に記入すること。  
試験時間は六〇分である。

1 「全学科の 必須」

この問題は、解答欄 1 ～ 14 に解答すること。

次の I・II の文章を読み、後の問いに答えなさい (50点)。

I

あれはいつだったろう。テレビの通販番組をほんやり見ていた時、妻がぼつりと言った。

「一昨年くらいだったかな、私、通販で買ったんだ」

「ん、何を？」

「ダイヤモンド」

「え?!」

驚いた。そんな話は聞いたことがなかったから。

「ダイヤモンド買ったの？」

「うん、でも5万円のだよ」

「通販で? 5万円の? ダイヤモンドを?」

「うん」

意外すぎて、思わず **A** 問いかけてしまった。

いや、通販でものを買うのは別に問題ではない。高枝切りバサミとか、訳ありのズワイガニとか。まったく問題ないのだ。5万円の買い物もいいだろう。コートとかブーツとか。ダイヤモンドだって欲しければいいと思う。 **(1)**、それはデパートとか専門店とかで買うもので

はないか。

でも、その三つの要素がビンゴのようにそろうと、話は変わってくる。私の知っている妻の行動とは明らかに違って、見知らぬ別人のようになってしまったような不安を覚えたのだ。 **(2)**、そんなことが起きたのか。混乱しながら、さらに問いかけずにはおられなかった。

「でも、そのダイヤモンドは見たことないよ」

「うん、1回も身に着けてないからね」

「どこにあるの？」

「さあ、引き出しかなあ。わかんなくなっちゃった」

妻の反応は、どこかぼんやりしていた。そこで、私は思い出した。ダイヤモンドを買ったという一昨年は、妻が仕事のストレスでメンタル的に不調だった頃なのだ。そんな時、彼女はたまたま目についたダイヤモンドに見えない救いを求めたのかもしれない。

だが、それは問題の本質的な解決からは微妙にズレていると思う。一種の逃避的な行動というか。本人もそれを感じたから、ダイヤモンドは一回も身に着けられないまま、どこかに紛れてしまったんじゃないか。

でもなあ、と思う。この流れ、わかる気がする。ダイヤモンドではないけれど、私も毎日が苦しかった時、ほとんど無意識に奇妙な逃げ道を求めたことがあったから。

こんな短歌を思い出した。

一日に三回ドトールに行ったじぶんのことをだめだとおもう

毎朝の習慣として決まったカフェに行く人はいるだろう。一日に2回ドトールへ行くこともあり得る。でも、一日に3回となると次元が変わってくる。明らかに最善の行動とは思えない。無意識の逃避めいた危うさを感じるのだ。本人もそのことに気づいている。 (3)、 「じぶん」のことを「だめ」だと思ったのだ。

こんな短歌もあった。

味のりを5袋ぐらいたべてから自分がまずい状態と知る

「味のりを5袋」に絶妙な駄目感が宿っている。ポテトチップスを一袋食べてしまった時なども後悔を覚えるけど、何かが違う。さらにやばいのだ。

実は、私にも同じ体験がある。

(4)

味のりは、あまり単体で食べるものではない。でも、ポテトチップスよりはヘルシーな気がして、

つい手を出してしまった。ところが、食べ始めたら止まらなくなって、気づいたら何袋もいってしまったのである。こんなことなら、最初からお握りを一つ食べたほうがよかった。

本人もわかっているのだ。そんな「自分」が「まずい状態」だと。そこがドトールの歌の「じぶん」に似ている。

通販の5万円のダイヤモンドと一日に3回のドトールと味のり5袋は、ばらばらのように見えて、どこか共通の匂いを感じる。いずれも犯罪行為などではないし、<sup>(a)</sup>飲む飲む打つ打つ買う買う的な振る舞いとも違う。人生の大失敗でも致命傷でもないのだ。

(5) その一見小さなダメージの中に、すべてを棒に振りそうな危うさの芽が潜んでいるんじゃないか。

ポイントは自分というものを見失っていることなのだろう。本当にやりたいこと、やるべきことから、無限に遠いところで今を生きている。これでは、「だめ」で「まずい状態」なのはわかる。でも、どうしたらいいのかはわからない。そういうことって確かにあると思うのだ。

世の中にはコストパフォーマンスに関するアドバイスや賢明なライフハックがあふれている。でも、私の心が本当に求めているのは、そういう有益な情報ではないらしい。

先に引用した短歌は、その逆なのだ。ちよつとした振る舞いの、小さなダメージの中に、底抜けの無益さが表現されている。その駄目感になぜか惹かれる。自分だけじゃないんだと思って、もっと見たくなる。生きるということの主成分のような無力さを感じて、<sup>(b)</sup>命のやばさを味わいたくなるのだ。でも、妻のダイヤモンドを見るのはちよつと怖いけど。

(穂村 弘氏の文章に基づく)

(注) ○ドトールー全国展開しているコーヒーショップ。

○ライフハッカーー仕事の質や効率、高い生産性を上げるための工夫や取り組み。

「人類は進化の勝者」という考えは間違っていると私は思う。そもそも人類に最も近縁なアフリカの類人猿は、二千万年前から勢力を伸ばし始めたサルたちに押されて、種の数を減らしてきた劣勢の種だった。サルに比べて消化能力も繁殖能力も劣っていたからだ。乾燥地や平原に進出したサル類とは対照的に、類人猿は現在も熱帯雨林とその周辺にしか生息していない。一方、地球が寒冷化し始めた七百万年前、人類の祖先は直立二足歩行を駆使して、熱帯雨林から徐々に草原へと進出を果たした。それは強かったからではなく、弱かったから縮小する森林に住み続けることができなかつたのだ。速力でも敏捷性<sup>びんしょうせい</sup>でも劣る二足歩行は、自由になつた手で食物を運び、安全な場所で仲間との共食を導いて人類の生存を助けた。

人類が粗末なやりを使って狩猟を始めたのは五百万年前であり、それまでは肉食動物に「狩られる」存在だった。互いの身を守るために助け合い、集団の規模を少しずつ拡大して肉食動物の脅威を防ぐことが人類の社会力を育てたのである。それは互いの社会関係を熟知して、即座に気持ちを理解し合う共感力によって鍛えられた。共食や共同の子育ては共感力の強化に役立ち、歌や踊りなどの音楽的なコミュニケーションはその触媒となった。つまり、人類は進化の大半を「弱みを強みに変える」こと<sup>(c)</sup>によって発展してきたのだ。

その共感力に満ちた社会に七万〜十万年前、言葉が登場した。それが人間を勝者と見なす大きな原動力になった。言葉によって世界を切り分け、物語にして出来事を因果関係によって解釈し始めた。人間は物語の主人公になり、環境を対象化して世界を支配するようになった。二千年前に農耕・牧畜という食料生産が始まったのも、人間を主役にして環境を作り替える考えが主流になったからだろう。苦難を伴う道だったが、やがて余剰の食料を生み出し、人口を増大させる道を開いた。

しかし、定住と所有という農耕・牧畜社会の原則は個人や集団の間に多くの争いを引き起こし、やがて支配階層や君主を生み出し大規模な戦争につながり **B** となった。集団間の争いで死亡する人の割合は巨大文明が発達した三千から五千年前に最大となった。そして

**C** の世の中を生き延びるためいくつもの世界宗教が生まれた。

この時期に人間は、現世の苦しみはあの世で救済されるという考えを抱くようになった。これは人類が長い進化の過程で発展させてきた共感力を、敵意を利用し拡大させる道を開いた。もともと共感力は百五十人程度の集団で働く顔見知りの仲間意識だ。急激に社会の規模を拡大し、顔も知らない人々が自己犠牲をいとわず助け合うために、支配層は、言葉を弄<sup>もよ</sup>し、武力を強化し、社会の外に共通の敵を作って団結する仕組みを作つたのだ。今でも戦争の基本的な考え方として力を発揮している。

産業革命はそれまで家畜の力に頼つてきた人間の暮らしを、機械の力によって拡大することに成功した。しかし、同時に自然の時間を

## D

な時間に変える役割を果たした。農村で季節の変化に従って生きてきた人々は、工場が立ち並ぶ都市に集められ、管理された時間に従って生産性や効率を高めることに精を出すようになったのだ。その結果、自然界にはない製品を作り出せるようになり、支配層だけではなく一般の人々も過剰に物を欲するようになった。それが無限の経済成長を信じる思想を育て、海外へ進出して領土を拡張、自国にはない産物を略奪する行為を正当化した。大航海時代と植民地主義はこうして始まり、人々を生まれ育ちや外見で差別する考えは今でも根深い。

人類が成功者として歩んできたという思想の裏に、実は間違えた道筋をたどった歴史が隠されている。地球環境が限界に達した今、人間の足跡を検証し、正しい道へと社会を向かわせなければならぬ。現代まで私たちは「過去へは戻れない」と思い込み、ひたすら前を向いて生きてきた。しかし、そろそろ過去の間違いを認め、共感力と科学技術を賢く使う方策を立てるべきではないか。管理された時間から心身を解放し、自然の時間に沿った暮らしをデザインする。それは長い進化の歴史を通じて人類が追い求めてきた平等社会の原則なのだ。

(山極寿一氏の文章に基づく)

問一 問題文Ⅰの (1)、(2)、(3)、(4)、(5) に入るものとして最もふさわしいものを、次のア～コの中からそれぞれ一つずつ選び、(1)は解答欄 1 に、(2)は (2) に、(3)は (3) に、(4)は (4) に、(5)は (5) にマークしなさい。

- ア しかも イ どうして ウ つまり エ そもそも オ なかんずく  
 カ ただ キ だから ク なぜか ケ すべからく コ にもかかわらず

問二 問題文Ⅰの A に入るものとして最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 6 にマークしなさい。

- ア 取り付く島もなく イ 引きも切らずに ウ 間髪を入れず エ 矢継ぎ早に オ 寝耳に水と

問三 問題文Ⅱの B、C、D に入るものとして最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、Bは解答欄 7 に、Cは 8 に、Dは 9 にマークしなさい。

- |   |       |       |       |       |       |
|---|-------|-------|-------|-------|-------|
| B | ア 温床  | イ 勸奨  | ウ 食傷  | エ 緩衝  | オ 職掌  |
| C | ア 無尽蔵 | イ 居丈高 | ウ 下剋上 | エ 不文律 | オ 野放図 |
| D | ア 機能的 | イ 効率的 | ウ 拘束的 | エ 能率的 | オ 人工的 |

問四 問題文Ⅰの傍線部(a)の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 10 にマークしなさい。

ア 周囲や家族の迷惑も一向に省みず、自分勝手な思いを通そうとするような様子。

イ 世間から後ろ指を指されるような事件ばかりを起こしても少しも反省しない様子。

ウ 極めて不品行な道楽の限りを尽くし、まったく修まらない自己中心的な様子。

エ 自分の好きな道だけを追求するばかりで、周囲からの批判を受け入れない様子。

オ 反社会的な行為にのみ走り、法的処分を受けても自堕落な生活をやめない様子。

問五 問題文Ⅱの傍線部(c)の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 11 にマークしなさい。

ア 流動的かつその場限りの事象に対して言語記号を割り振ることで、経験を明確に対象化し、反復可能な事柄として普遍的な知識の基礎を把握したということ。

イ 牛肉の部位を細かく分割したり、同じ魚を成長段階で区別したりするように、日常言語の機能の中に、事物や周囲の物事を確定する新たな働きを創出したということ。

ウ 言語記号を使用する唯一の生物となったことで、会話を通して情報交換が可能になり、自分たちの過去を記憶し、未来を予測する能力を持つようになったということ。

エ 言葉で世界全体を区切り、その一つ一つを意味づけることで人間の世界とそれ以外の自然界を確定し、対象としての自然を利用する手段を得たということ。

オ 共感力によって共同生活を営むようになった人類が言語能力を得たことで、危険回避や共同作業の効率を上げて、農耕・牧畜を始める転機となったということ。

問六 問題文Iに引用されている2首の短歌について、自分のことを「だめ」だとか、「まずい状態」だという語句には何が表現されていると

いうのか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 12 にマークしなさい。

ア 毎日の多忙な業務の中で、無意識に現実逃避的行動を取っている自分に、その時、初めて気づくとは、本来の自分を見失い、本当にやりたいこともわからなくなって精神的な状況も限界に来ていることを示していて、そこに現代人の生き方に欠落した何かへの暗示があるということ。

イ 自分の仕事が悪習慣化してしまい、ほとんど無意識に行動することになったために、今、何のために行動しているか、生きているのかという意味を見失い、効率重視の世の中から逸脱しかけている自分自身に気づくことが、本来の人間の主体性を取り戻す機会になっているということ。

ウ 一日に同じカフェへ3回行ったり、本来なら食事のおかずの一種としての「味のり」だけを5袋も食べ続けてしまったりすることは、個人的な嗜好性の範囲であるはずなのに、この行動を取っている自分を批判する表現が出てくるのは、現代人の安定的な生活習慣を乱すことへの戸惑いが現れているということ。

エ 仕事の疲労から少し気分転換を図るための休憩時間に、何回も同じカフェに入ったり、お菓子でもない「味のり」をいくつも食べてしまったりする行動の異常性を自覚する表現を短歌にすることは、日常経験を定型的な表現形式の中に整え、定着させることで自分の限界を明示することになったということ。

オ 気づくと同じカフェにいたり、ヘルシーさに促されて妙なものをいくつも食べてしまったりすることには、小さなダメージが徐々に蓄積され、その結果すべてを棒に振る危険地帯に落ち込みそうな芽が潜んでおり、本来の人間の生活から無限に遠いところで生きざるを得ない自分を発見することにつながるということ。

問七 問題文Ⅱでは、人類の進化の過程には「間違い」があったと記されている。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 13 にマークしなさい。

ア 産業革命によって機械に制御された生産力を駆使して効率を追求する社会の仕組みを構築できたが、もともと自然界にない製品を生み出すことは、支配層だけではなく一般の人々にも過剰な物欲を促し、無限に経済成長を続けることができるかのような信仰を育てあげてしまい、人種差別などの排他的な思想を生み出したということ。

イ 他の肉食動物に狩られる存在だった人類の祖先は、粗末な道具を使用しながら集団で生活することで弱さを補い合いつつ、共感力を強化していくことで独自の社会力を育んできた。しかし、自分たちを主人公とする物語を通して、環境を支配し、食料生産を高めたことで、人間の階層化が始まってしまったということ。

ウ サルに比べて消化能力も繁殖能力も劣り、行動力としても劣る二足歩行は、熱帯雨林からの追放をもたらしたが、人類はこれらの弱さを仲間との助け合いを通して補い、集団生活の中で社会力を育んできた。しかし、農耕・牧畜の展開は余剰の食料生産と人口増大を招いた結果、大規模な戦争が起きてしまったということ。

エ 人類が道具を使用して狩りを始めてから、農耕・牧畜によって自然環境を作り替えるようになり、定住と所有という社会原則が行き渡ったが、これが集団間の争いを引き起こした。さらに支配階層や君主の出現は大規模な戦争を引き起こしたが、共感力をも敵意を利用して拡大させることになったということ。

オ 集団生活の中で共感力を養ってきた人類が言葉を使うようになって、物語の主人公となり、世界を対象化し、支配する思想が定着した。高効率な食料生産が数々の巨大文明間の戦争を引き起こした末、支配層の権力は強大になり、産業革命後の経済成長神話の中で略奪と差別がつきまとう社会をもたらしてしまったということ。

問八 問題文Ⅰの傍線部(b)について、問題文Ⅱの趣旨を踏まえた説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄

14 にマークしなさい。

ア 現代に生きる人々の日常生活の中の小さなダメージの蓄積が、人々に無自覚な逃避行動をもたらしており、その駄目感の自覚において自分自身を喪失している現状が見えてくる。そして、この自分へのサインは、これまで人類の進化してきた道筋がどこかで間違っていたことを暗示しつつ、人口過密を招いた都市生活とそれを支える自然環境の限界を知らせるものであり、その危機感にこそ逆に人類の生命感が示唆されているということ。

イ 現代社会を生きる人々が、業務遂行を至上とする多忙な生活の中、ふとした行動で自覚する自分への違和感は、もちろん人生の大失敗でも致命傷でもない。しかし、この現状のすべてを棒に振りそうな危うさの芽、自分への危機感から来る無意識の逃避的行動の中には、自らを主人公とし世界を支配するまでに至った進化を疑い、前進だけを良しとする生き方から逸脱し、管理された時間から自然の時間に沿った生き方への志向性が示唆されているということ。

ウ 人類の進化の過程において、ごく小さな集団の中で機能してきた共感力と、情報交換のための言語能力の駆使が、より大きな集団生活と限りなく領土を拡げる欲望を育んできた。しかし、その結果としての過剰な物欲や無限の経済成長を信じる思想が、人類を成功者、自然界の頂点に立つ生物という思い込みを増大させ、遂には、現世を捨てて顧みず、あるかないか不明の来世に期待するという考えを定着させてしまい、もはや個人的な危機意識においてのみ生命感が現れるということ。

エ 類人猿はサル類に比べて劣勢の種であり、熱帯雨林の縮小に伴って草原へ追いやられた存在であったが、その動物種としての弱点が仲間との共感力を育んで集団生活を可能にし、やがて道具の使用とともに集団を維持し拡大させる社会力を増大させ、言語の登場がこれに拍車をかけた。定住と所有が戦争や階層を生み出し、自然全体を支配し利用する考えを進め、人間自身を管理する社会をもたらしたが、そうした現代人の危機感が表れているということ。

オ もはや過去に戻ろうとしても戻れないのは自明なことだが、現代生活の矛盾点が人々の毎日の仕事の合間に顔を出し、その時になってようやく自覚される切実な疲労感が、人々の身体の危機を表現しており、それが過去への回帰を促していることは否定できない。しかし、過去への郷愁を短歌などに表現することは、人類に備わっている共感力を想起させ、不特定多数の読者の感情移入をもたらすことになり、自分だけではないという思いと、生命感の核心を把握する契機になるということ。

**2**

〔文学部の必須〕。神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は解答しないこと〕

この問題は、解答欄 

21
----

 ～ 

35
----

 に解答すること。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい（50点）

年のうちに春は来にけりひととせを去年こぞとやいはむ今年とやいはむ

(a) 古今集巻頭のこのいわゆる年内立春の歌は、暦制の上の春をあらかじめ基準としておき、自然の春の到来のそこからの乖離をひとつのずれとしてとらえるということが主題のすべてをなしており、さらにその自然の春の到来じたい、具象的な事物をいっさい捨象した「春は来にけり」という一般性において総括されている。万葉の歌と比較してみると、観念としての時候の、自然性としての時候からの自立と疎外という、古今の時間意識の特質をそれはよく集約している。

袖ひぢてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ

この第二首もまた、氷がとけてゆくことをみて春を知るのではなく、暦制の上の立春であるからには、氷もとけていることだろうと、まずたてられた観念の時節の方から事象を推定する方向をとる。

春霞たてるやいづこみよしのの吉野の山に雪はふりつつ

雪のうちに春は来にけり鶯のこほれる涙今やとくらむ

つづく第三、第四首である。

第三首の解釈はいくつかありうるが、原作者の意図はともかく古今集の編集方針からすれば、この歌もまた第一首とおなじ趣向の、暦制の立春からの自然の春のずれを主題化したものとして、少なくとも遇されていることは明らかである。第四首もまた、第一、三首と第二首の趣向を

それぞれむすびつけながら、暦の上の立春を主体としてよまれている。

永藤靖も指摘するとおり、稲のみのりを秋となし花のほころびを春とした上代の人びとの季節感<sup>(b)</sup>は、「無色透明な時間において季節をまず観念的に決定してしまい、歌という個人的な、一回性の作品をそのなかにはめこんでいく作業、それが古今集の編者たちが考えた季節美感というものの本質であった」。ここでは〈時間〉が、事物からひきはがされ、自存する対象として観念されたうえで、さらにこの観念の時間がぎやくに、眼前にあるものごとの意味を規定する主体<sup>(c)</sup>＝実体とされる。このような「時間のいわば対象化的な主体化を、ここでは〈時間の物神化〉と呼ぼう。

古今集の構成自体が、準拠枠としての暦、すなわち、観念として構成された〈世界の時間〉を客観的にあるものとみだてた上で、この時間内存在としての世界と人生を詠む。

個々の作品の内容に即してみても、万葉の歌がそれぞれに「今ある時」の経験の具象性のうちに没入するところからその生動をつたえているのに対し、古今の歌が「時間のながれ」をそれ自体として対象化し、個々の自然も人事も<sup>(1)</sup>あたかもそのための素材としてあつかわれていることは、ほとんどランダムにどの作品をとりあげてもいえることであり、すでにさまざまな文脈において、諸家の一致して指摘するところである。ここでは永藤靖が述べているところを引用してこの点の叙述に代えよう。

以上、万葉的なものと古今的なものを時間意識という視点に立って見てきた。万葉集の場合は、花が咲く歌であれ、散る歌であれ、その物をそのように存在たらしめている時間の頂点、瞬間を歌っている。作者の今、ここにある心と対象とはまっすぐに向かいあっているといつてよい。これに対して古今集の場合、時間は一つの抽象的なものとなり、いかにこれを細分し、分類し、配列しても観念の増殖を助長するにとどまり、それがいかに精緻に緻密になっても、そこで歌われている世界からは物そのものが消えていく。

「世界からは物そのものが消えていく」という指摘は重要である。それはいわば、生の手ざわりの喪失<sup>リアリティ</sup>であり、今ある生の内的な意味の減圧が、生の外的な意味をその外部に求めて時間意識を拡散させるのだ。

これらのことは、掛けことばや縁語や見立てや本歌取りにみられるような、古今集における言語空間の自立、あるいはその自然性からの疎外とも照応している。

ほととぎすなくや五月（あき）のあやめ草あやめもしらぬ恋もするかな

あきの野にみだれてさける花の色のちぐさに物を思ふころかな

夏虫をなにかいひけむ心からわれもおもひにもえぬべらなり

これらの恋愛の歌をひきながら永藤は、古今が最も得意とした「人間の心理の時間」のこの領域においてすら、それらの歌が「<sup>(d)</sup>恋愛というものを歌ってはいるが、恋愛そのものを歌っていない」というふう<sup>(d)</sup>に指摘している。

世界とのいわば身体における共生関係からの離脱が、人間的な時空の自立をもたらずと同時に、〈生きられる共時性〉からの疎外が生を空虚にうわすべりするものとしている。

昨日といひ今日と暮らしてあすか川流れてはやき月日なりけり

とりとむるものにしあらねば年月をあはれあな憂と過ぐしつるかな

とどめあへずむべもとは言はれけりしかもつれなく過ぐる<sup>よはひ</sup>齡か

世の中はなにか常なるあすか川昨日の淵ぞ今日は瀬になる

古今の時間を典型的に示すこれらの歌は、同時にまた、ここで述べてきた諸論点をよく立証している。ここでは万葉の時間意識を最後までつらぬく基底音をなしていた、世界の恒常性、時間の可逆性の感覚はあとかたもなく解体し、時間はただとどめもあえぬものとして流出している。

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり

秋の菊にほふかぎりはかざしてむ花よりさきと知らぬわが身を

自然の時間の I から剝離してゆく人間の時間の

II、疎外としての人生の感覚をうたったこれらの歌には、おそらく、そ

れなりの深い実感がこめられていたはずだ。考えてみれば万葉の歌は、最後期のわずかのものを除けば、このように未来に向けられた時間の意識を切実にうたうことはなかった。みずからの死に向けられた古今のこれらの歌のリアリティは、いったんは客観化された知として存立する観念の時間によって媒介された実感であることがわかる。

かつて人麻呂の「近江荒都の歌」にうたわれた琵琶湖の辛崎からさき（唐崎）は、古今ではこういうふうにうたわれてその帰無してゆく時間の形象を完成している。

かかたの方にいつからさきに渡りけむ波路はあとも残らざりけり

このような意識の現実的な基盤は、いうまでもなく、奈良から平安へとたどる古代国家の官僚制の成熟と幾世代を経た都城の生活の中で、これらの歌の作者であった貴族・家臣団の生活基盤が、直接に対自然的な生産活動からはもちろん、家持らにまだあったような本貫地の氏族共同体との紐帯からさえも疎外され、もっぱら宮廷をめぐる貴族間のソフィステイケートされた権力争いのうえにおかれていたことにある。枕草子などにリアリティをもって描かれているように、除目じょもくに一喜一憂する官人貴族の、「榮枯盛衰」<sup>(e)</sup>の人為性の加速化がそこにはあった。古今集巻十八のうちにあつめられている、世の無常をなげく作品のうちのいくつもが、仕官を得ぬこと、あるいは仕官を免ぜられたことを契機としてよまれている。

ここで古今の歌人のうちの、「こころ」の歌い手としてしられる業平と小町をとりあげてみよう。

世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし

古今集中、業平のものとして最初に出てくる歌である。紀友則の「ひさかたの光のどけき春の日にしづこころなく花のちるらむ」等々とおなじ趣向の月並(2)みな平安貴族のあそび歌として読みくだすこともできよう。

けれども業平とその一族のおかれた不遇(3)と、「体貌閑麗、放縦不拘」という『日本三代実録』の人物評などをふまえてみると、「世の中に絶えて桜のなかりせば」と吐きすてるようによまれた発句の中に、もう少しただならぬものをよみとることもできよう。わが世の春と咲きほこる藤原良房一門への諷諭をこの歌に直接によみとることは控えるとしても、世間の貴族が一樣に桜、桜と浮き身をやつしつたがいに(4)おもねているさまにたいする業平のわだかまりをそこにみることはできるだろう。

散ればこそいとど桜はめでたけれうき世になどか久しかるべき

という『伊勢物語』の、これも業平の作とおもわれる歌をもあわせて、「世間から隔てられてある自己、いいかえれば世間を流れている時間と、詩人は自己の内部の時間を対比させている」。このように永藤はいう。

大方は月をもめでじこれぞこの積れば人の老いとなるもの

の歌もまた、花月の対をなす傍証とすることもできよう。

これらの歌には、「世の中」の共通感覚から剝離してゆく個体の意識、共同の美意識に逆立する個我の感性、疎外としての固有時の析出が証言されている。人生の時間の消尽してゆくさまを一見冗談半分にひきとどめようとしている「大方は」の歌は、これひとつだけをとってみるならば、白楽天などをふまえたひとつの知的なあそびにすぎないとみることもできる。

けれども業平の老いや死を歌ったものはいくつかあって、古今集のそのような歌の中でも、きわだって実感がこめられている。

つひにゆく道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを

世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もとなげく人の子のため

さくら花散りかひくもれ老いらくの来むといふなる道まがふがに

「つひにゆく」は『伊勢物語』最終段の歌として知られているが、「病して弱くなりける時よめる」と注されていて、古今の歌として異例なほど、技巧もなにもない率直な歌だ。「世の中に」は老母に贈った歌である。「さくら花」は華麗な歌であり人に贈った賀の歌であるが、「花吹雪の向こうには確実に自身をいざなう死に対する戦慄がある」と永藤がみているように、自己の実感を託したものだろう。

濡れつつぞしひて折りつる年のうちに春はいくかもあらじと思へば

もまたこのように、消尽してゆく人生の時間とのたたかいの意識の濃厚な歌である。

時に感動することはあっても時間を対象化することのなかった初期万葉以前の**人びと**、さらに時間に傷心することはあっても、自己の未来に向けられた恐怖のなまなましとして実感することのほとんどなかった後期万葉の歌人たちとも異なっており、ここでは自己の未来に向けられた時間意識の恐怖としての**古いと死の心像**が、**個我の意識の自立の影**として、**花月にふれる感動**をいつも独自の仕方で立体化してしまうような固有の奥行きを構成している。

同時に他方、業平において、この未来に向けられた時間意識の実存的な恐怖の対象が、近代の思想家たちの**ばあい**のように、抽象的に普遍化された死の恐怖としてではなくて、それよりは具体的な**なかたち**で、すなわち、**病に伏して「きのふけふ」**のこととなるとき以外は、おおかたは**古い**の恐怖としてイメージされていることが注目される。すなわちそれは、自己自身の意識の消滅としてよりは、さしあたり**若さの消滅**として、いいかえれば、**抽象化されたコギトの運命の絶対性**のようなものとしてでなく、より具体的な**身体の運命の不可避性**としてとらえられている。

それは、死の恐怖というものが未だ、死者の死体への恐怖および、死者との**別離の悲しみ**として、**身体的・対他的**にしか存在しなかった初期古代人の感覚の Ⅲ を保持したままでの、**実存的な未来の獲得**ということができる。

小野小町も同様である。

花の色は移りにけりないたづらにわが身よにふるながめせしまに

という代表作をとりあげてみよう。うつろいゆく Ⅳ の時間と、もの思いに沈澱する Ⅴ の固有の時間との**剝離の感覚**がそこにはみられる。けれども同時に、「わが身よにふる」という言い方にみられるように、この歌の実存の時間の感覚は、あくまでも**身体的な、かつ対他関係的な具体性**をもつものであって、近代の思想家の**そのように抽象化された対自のゆくえの虚無感**ではない。

同時にこのような**実存の時間恐怖の身体的・対他関係的な性格**が、**性愛的な耽溺<sup>5)</sup>による時間の超克**へと人びとを駆ったであろうことも了解することができる。このような**時間感覚の最も鋭い保持者**であった業平や小町が、**外見的には、なによりもまず、あくことのない恋愛の達人**として後世つたえられ、**当時もまたそのようにみられていたらしいことは、偶然ではない。**

万葉の恋の歌は**対者との共振のうち**に身をゆだねているから、**恋の時間**はそのものとして**対象化**されることがない。古今の恋の歌の巻頭にあって**〈規範歌〉**のような位置を占めているのがすでに引用した「ほととぎすなくや五月のあやめ草あやめもしらぬ恋もするかな」であるけれ

ども、それはこのように「時をしらない」前代の恋を恋一般の規範として主題化しながら、じつはそのことによってまさしく、恋というものを対象化してしまっている主体を外化し析出するという逆説をみせているように思う。

今はとてわが身時雨しぐれにふりぬれば言の葉さへに移ろひにけり

色見えで移ろふものは世の中の人の心の花にぞありける

秋風にあふ田の実こそかなしけれわが身むなしくなりぬと思へば

わびぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ

小町のこれらの歌のあやなす技巧のうちには、時代の性愛関係が、そのつどの残響する倍音のように個体のうちに刻印し蓄積してゆく、固有の時のながれの意識のいたみが顔をのぞかせている。古今の貴族社会の愛の多角性と一時性、非・自然化ソフィスティケートされた遊戯性が、対者との〈生きたる共時性〉からのその都度の余白のように、個体の時間意識を析出してしまうのだ。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

という業平のよく知られた歌も、自然の時間からの実存の時間の剝離を切実たらしめる<sup>(6)</sup> よすがとしての、〈対〉の関係の非条理を言外に指し示している。

〈実存の時間〉の意識の歴史的な発生機としての成熟した古代社会におけるそれが、すぐれて身体的・対他関係的な具体性を喪わないものであったとすれば、またそれが、さしあたり一方において「あやめもしらぬ恋」の時への希求を切実なものとしながら、しかもこの恋そのものが個体をふたたび実存の時間のいたみに投げ返す構造をもっていたとするならば、このような初期の〈時間の恐怖〉をのりこえる様式がやがて、「世の中」から意志的に身を隠すこと（出家・遁世）において見出されたことも、たやすく理解することができる<sup>(f)</sup>。ただし実存の時間の恐怖のこの初期のかたちにおいては、問題は対自としてのコギトの消滅等々ではなく、さしあたりは老醜をさらすことなく愛欲執着を断つことによつて解決しうる性格のものであったからだ。

心こそうたてにくけれ染めざらば移ろふことも惜しからましや

この歌も小町のもと推定されているが、そこにわれわれは古代末期から中世に向かう時間意識の萌芽のひとつをみることができるといえる。

(真木悠介の文章に基づく)

(注) ○年内立春―二十四節気の「立春」の日が、年によっては旧暦の冬十二月中に巡ってくるという現象。

○除目―任官人事の辞令。 ○放縦不拘―勝手気まままで礼節にこだわらない性格。

○白楽天―白居易。中唐の詩人。 ○コギト―自己意識。実存。

問一 二重傍線部 (1)～(6) の意味として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中からそれぞれ一つずつ選び、(1) は解答欄 21 に、(2) は

22 に、(3) は 23 に、(4) は 24 に、(5) は 25 に、(6) は 26 にマークしなさい。

(1) 21

オ さりげなく  
 エ たまたま  
 ウ もしかして  
 イ ともかく  
 ア まるで

(2) 22

オ ありきたりな  
 エ わかりやすい  
 ウ とびぬけた  
 イ おあつらえむきの  
 ア みごとな

(3) 23

オ 思い上がって孤立した状態  
 エ 好かれず避けられている状態  
 ウ 見出されず恵まれない状態  
 イ 経済力がなく貧しい状態  
 ア 能力がなく活躍できない状態

(4) 24

オ さげすんで  
 エ はりあって  
 ウ ゆだねて  
 イ へつらって  
 ア ねたんで

(5) 25

オ 負担になること  
 エ 夢中になること  
 ウ 活発になること  
 イ 禁欲すること  
 ア 停滞すること

(6) 26

オ かがみ  
 エ なごり  
 ウ いしずえ  
 イ 目くぼせ  
 ア 手がかり

問二 傍線部 (a) について、この歌を『歌よみに与ふる書』の中で「しゅれにもならぬつまらぬ歌」だと酷評し、古今集は「くだらぬ集」だと言いつつ近代の歌人を、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 **27** にマークしなさい。

ア 斎藤茂吉      イ 石川啄木      ウ 正岡子規      エ 与謝野晶子      オ 島木赤彦

問三 傍線部 (b) の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 **28** にマークしなさい。

ア 古今集の季節感の上代の季節感を逆転させており、稲のみのりに春を感じたり、花のほころびに秋を感じたりと、現実と逆のことを歌っているということ。

イ 古今集の季節感の上代とは合わなくなって、稲がみのらない秋や、花が咲かない春のような、自然を否定した和歌を作るようになっていたということ。

ウ 古今集の歌は暦制の立春と自然の春のずれを主題としているので、それが一致してしまわないように、わざと暦をずらして和歌を作っているということ。

エ 古今集の歌は自然の変化から季節を推定するのではなく、暦によって季節を決定し、そこから自然の変化を推定するという発想で歌われているということ。

オ 古今集の編者たちは自然との関りが希薄であるため季節を実感する機会に乏しく、一回的な作品の中でしか季節の美を歌うことができなかったということ。

問四 傍線部 (c) の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 **29** にマークしなさい。

ア 時間が他の事物から分離され独立したことによって、事物と同じひとつの実体として位置を占めることができたという状態。

イ 暦によって客観的に表示された時間が絶対的な規準とされるようになり、事物の意味はそれに従って規定されるという状態。

ウ 目に見えない時間を目に見える対象へと変化させることによって、眼前にあるものごとがすべて見る対象となるという状態。

エ 動作の主体にはなりえなかった時間を擬人化することで、季節を変化させる存在として認識できるようになったという状態。

オ 時間がどこまでも万能な主体であると理解されるようになり、神のごとき存在として絶対視されるようになったという状態。

問五 傍線部 (d) の説明として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 30 にマークしなさい。

ア たしかにこれらの和歌に歌われているのは恋愛感情には違いないが、万葉集の時代の人々と比べると、まだまだ恋愛の経験が不足しているということ。

イ これらに歌われた恋愛は素朴で生々しい感情にとどまっていて、本格的な恋愛歌として文学的に評価できる水準にはまだ達していないということ。

ウ これらの恋愛感情は初々しい新鮮な感覚ではあるが、恋愛そのものを深く追求したとは言えず、人間の心理に対する洞察がまだ足りないということ。

エ 人間の心理を理解することを得意としている古今集でも、恋愛を美しく歌ってはいるが、苦しさという心理が十分に歌われてはいないということ。

オ 和歌の題材として恋愛という観念を歌ってはいるが、しかしそれは作者自身の実感的な恋愛体験や恋愛感情を歌っているわけではないということ。

問六 空欄 I と II に入る語の組み合わせとして最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 31 にマークしなさい。

- |   |   |     |   |    |     |
|---|---|-----|---|----|-----|
| ア | I | 可逆性 | ・ | II | 恒常性 |
| イ | I | 固有性 | ・ | II | 制度性 |
| ウ | I | 個別性 | ・ | II | 共時性 |
| エ | I | 循環性 | ・ | II | 一回性 |
| オ | I | 主観性 | ・ | II | 客観性 |

問七 傍線部 (e) の理由として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 32 にマークしなさい。

ア 平安貴族にとっては、「栄枯盛衰」の定めというものが普遍的な真理であるよりも、任官という人為によって具体的に実感されるものとなっていったから。

イ 貴族間の激しい権力争いが加速したことで合戦に発展し、その勝敗によって「栄枯盛衰」という言葉がますます現実味を帯びてゆくことになったから。

ウ 個人と氏族共同体とのつながりが弱体化したことによって生活基盤が失われ、それぞれの貴族の「栄枯盛衰」の様相がはっきりと見えるようになったから。

エ 「栄枯盛衰」と言われるものは人為的に作られたものにすぎず、事実には反しているという裏の事情が、枕草子などによって明らかにされてしまったから。

オ 官人貴族は自らの「栄枯盛衰」に世の無常を感じていたが、古今集の時代にはそれを和歌という人為的な言語によって表現することが広まっていったから。

問八 空欄 Ⅲ に入る語として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 33 にマークしなさい。

ア 不可避性

イ 普遍性

ウ 具体性

エ 歴史性

オ 観念性

問九 空欄  と  に入る語の組み合わせとして最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄  にマークしなさい。

- ア IV 個我 ・ V 実存
- イ IV 世間 ・ V 自己
- ウ IV 現在 ・ V 未来
- エ IV 恋愛 ・ V 恐怖
- オ IV 無常 ・ V 虚無

問十 傍線部 (f) の理由として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄  にマークしなさい。

ア 「あやめもしらぬ恋」を切実に希求した小町も、わが身の老醜を恥じるようになり、出家を考えるようになったというのは共感できる気持ちであるから。

イ 恋愛の達人と見られていた業平も、老いや死を意識するようになってきたので、「もとの身」を隠すしかないという判断をするのも当然だと思えるから。

ウ 自然の時間に対抗することで見出された実存の時間においては、老醜に対する恐怖心が特に強いので、絶望して身を隠すというのは自然な処置であるから。

エ 自己存在の時間的限界と未来に対する恐怖が、老いに対する恐怖という身体的なレベルで捉えられているうちは、身体を隠すことが解決となりえたから。

オ 恋愛には実存の時間の苦痛を超克するという作用があるが、にもかかわらず実存の時間を対他的に析出し回復させてしまうという逆説的な構造があるから。

3

〔神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部の必須〕。文学部は解答しないこと

この問題は、解答欄 41 ～ 48 に解答すること。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(50点)

夏の終わり、秋の初め、確実に日が暮れるのが早くなってきていて、それでも昼間は<sup>(1)</sup>殊勝に鳴いていたセミたちが、ピタリと鳴き終わる瞬間があります。ジージー、ミンミンこれが最後と鳴いていた連中が鳴き止んで、そのまま地面に住む人たち、コオロギ、松虫、秋の虫たちの涼やかな声に移行する瞬間とというのがあって、それが面白く、この時期のこの時刻、私は耳を凝らします。

そのあと、あの人たちは文字通り夜通し鳴いています。窓を開けていると夜気がひんやりと肌<sup>(2)</sup>に滲み<sup>(3)</sup>てくるように、彼らの声はこちらの心に秘めやかに沁み込んでくる。夏の名残の吟醸冷酒でイッパイやりながら、目を閉じて聴いていると、自分が虫の音となって鳴っているような感じになる。<sup>(a)</sup>これが妙趣であります。

虫の夜の 星空に浮く 地球かな 大峯あきら

この感じですね。秋は空気も澄んでくるから、ちょっと山の中に行けば、満天の星が眺められます。虫たちの大合唱を聴きながら、頭上の星々を見上げれば、当然この感じになっていくはずですよ。

この句が面白いのは、虫の音を聴き、星空を眺めているところの私が、虫の音となり星空となる逆転の構図を鮮やかに捉えているところで、<sup>(b)</sup>「浮く」の一語が、端的にそれを表しています。

人はたいてい、客観的物理的な世界というのが、自分の先に存在していて、自分はあとからそれを経験するのだと思いますが、よく考えると、そうではない。外界の虫の音を私が聴き、外界の星空を私が眺めているのだと思っ<sup>(c)</sup>ているのですが、じつはそうではないのです。

たとえば、ヘッドホンをつけて大音量で音楽を聴く時、音楽は「どこで」鳴っているのでしょうか。「私の頭の中で」それは鳴っているとは、<sup>(c)</sup>どうも言い難い感じですね。聴覚神経への刺激が脳に伝達され、それが音楽として認識されるなんて説明は、完全に事後の説明、文字通り<sup>(c)</sup>の「説明」であって、事柄そのものでは決してない。事柄そのもの、純粋な経験としては、ただ音楽が鳴っている、いや、音楽が存在する、世

界が遍く音楽であるという、そういう経験であるはずで、夢中で音楽に聴き入っている時、「私が聴いている」なんて言語化が蛇足であるのは実感ですよ。

仮のこの言語化、科学的説明が正しいとしても、音を聴くというこの経験そのものの何であるかを言っていることになりません。なぜなら科学は、この「聴く」「聴いている」という自明の経験を前提として、そこから説明を始めていくわけだから、前提そのものの何であるかを説明できないのは当然なのです。耳の聴こえない人に、音を聴く、音が聴こえるというのはこういうことだと、この科学的説明により理解させることはできません。「聴く」「聴こえる」という経験は、今まさに聴いている、聴こえているというこの経験、この感じ以外の何ものでもない。だからこそ経験とは不思議なものなのだ。経験は、「どこに」「誰に」生じているのか。

科学的説明が、ただの説明であることを忘れると同時に、人は、この純粹経験の不思議さを忘れることになります。そして、「私が聴いている」「私が見ている」という主客二元、主語述語の世界観を、思わず知らず受け入れることになる。この世界観は、我々の経験を、自ずから瘦せたものにしてしまいます。

ある対象に感動して、「我を忘れた」経験において、人は、対象と「一体化した」「一体感が生じた」と拙くも表現しますが、<sup>(d)</sup>言語は常に経験を裏切っている。「一体化した」その経験こそが、本来の素直な経験であって、もし言うなら、「私はそれであった」「私はそれとして存在した」と言うべきでしょう。「一体化」と言う限り、主客の分裂が認められていることになりますからね。でも、そんなものは、本当は存在していないのです。

それで冒頭の句に戻りますと、秋の夜長に私が虫の音を聴いているのではない。ただ虫が鳴いている。(私が)虫の音として鳴っている。私が星空を眺めているのではない。(私が)星空として存在していると、こういうことになります。科学的世界観成立以前の、これが本来の世界のありようなのです。

しかし、この句がさらに悩ましいのは、そういう主客分裂以前の一元的世界、主客は混然と一緒なのだといった曖昧な感慨に我々を安住せしめないところにあります。なぜなら、再びそこから立ち上がるものがある。結の句に、なんと「地球かな」と来る。「地球かな」と。

「地球」と聞けば、誰もが地球を表象します。暗黒の宇宙、果てなしの星空の中に、青くぼつかりと浮かんでいるこの地球を、ちょうど宇宙飛行士がそれを眺めている視線によって、鮮やかにイメージします。さてでは、この時、その地球を眺めているのは、いったい誰なのでしょうか。

虫の音と星空に一体化して、憩っていたこの私、これは確か地上に存在していたはずだ。ところがその眼が突如として、宇宙の真ん中に見開

いた。宇宙から地球の私を見た。地球の私を見ているこの眼は、いったい誰の眼、誰なんでしょうか。

これまた純粹経験、知覚の不思議ですが、「見る」ということは、必ず私によって行なわれているものだ。私以外のものが、私が見るものを見るということはない。世界とは、私によって見られている以外のものではあり得ないのだから、私が見ているものは、必ず私が見ているものだ。したがって、地上の私を見ているこの眼もまた必ず私なのだ。ああ、何という悩ましいことか、全宇宙を見抜き見晴らすことができるこの眼は、しかし、見ているこの眼だけは見ることができないのだ。<sup>(e)</sup> 眼は自分だけは見ることができないのだ。これはもう、どうしてもできないことなのですよ！

「私とは何か」という恐るべき問いの本来、永劫の謎の形がこれです。ほんとに困ったことだ。

じつさい、外界の星空を眺めている私の内界にその星空は存在するなんて、とんでもないことですが、事実です。これは、無限を考えることにおいて無限は（私の内に）存在するというあれと同じですが、こういう奇てれつな存在の構造、知っていると、季節の味わいも一段と深いものになります。虫の音ひとつ聴いたって、もう宇宙旅行というわけです。

（池田晶子『暮らしの哲学』毎日新聞出版所収「悩ましき虫の音 秋の夜」）

問一 二重傍線部 (1)・(2) の意味として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中からそれぞれ一つずつ選び、(1) は解答欄 41 に、(2) は

42 にマークしなさい。

(1)  
41

ア すこやかに  
イ けなげに  
ウ さかんに  
エ しきりに  
オ さわやかに

(2)  
42

ア はかなんで  
イ やわらいで  
ウ くつろいで  
エ たたずんで  
オ たのしんで

問二 傍線部 (a) の説明として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 43 にマークしなさい。

ア 秋の夜に窓から吹く風を感じていると、肌に沁み込んで心を深く揺さぶるように、切ない虫の音に触れていると、季節の移り変わりがわが身のありかたと結びついてしみじみとした気分になることは、この上なく風流だということ。

イ 夏から秋に移行する夜の空気を部屋の中に取り込むと、季節の変化が身をもってわかるように、夜に鳴く虫たちの声に耳を傾けていると、自分が虫となって鳴いている心持となることには、実に不思議な情緒があるということ。

ウ 秋の夜風に身を任せると、移り変わった季節の涼しさが体の奥まで届くように、残された時間を精一杯楽しむかのような虫の声に引き付けられると、人生の深い味わいを身の内に感じるようになるのには、おかしな感動があるということ。

エ 秋の夜に窓を開けていると、肌に触れる涼やかな大気をいつの間にか身の内に感じるように、虫たちの鳴く声に集中して聞くうち、自分がその音色と化しているような感じとなるのは、なんともすばらしい味わいがあるということ。

オ 秋の夜の空気に触れていると、その涼しさが心を落ち着かせて季節を体で感じるように、虫の音にじっと耳を傾けていると、自分がその音色となって夜の世界に放たれる気がするのは、なんだかおかしな感じだということ。

問三 傍線部 (b) の説明として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 44 にマークしなさい。

ア 虫や星にもなることができるという人間の想像力のすばらしさを、「浮く」という言葉で示峻的に伝えているということ。

イ 知覚する私とその知覚対象になってしまうという経験の不思議さを、「浮く」という言葉で明白に表しているということ。

ウ 知覚されるものと知覚するものが入れ替わるという逆説の妙味を、「浮く」という言葉でうまく示しているということ。

エ 星空と虫の対比によって生じる知覚の混乱という面白さを、「浮く」という言葉で鮮やかに描き出しているということ。

オ 知覚の転倒はしばしば起こっているという事実への驚きを、「浮く」という言葉でつまびらかに表現しているということ。

問四 傍線部(c)の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 45 にマークしなさい。

ア 音楽を聴くということについて、聴覚神経への刺激が音になるという説明は、自分の頭の中で音楽が生まれるという状態の意義を必ずしもつまびらかにするものではないということ。

イ 音楽を聴くということについて、物理的な世界観に依拠した説明は、音楽を聴く私の存在のありかを決して明瞭にするものではないということ。

ウ 音楽を聴くということについて、人間の音の聞こえ方の客観的な説明は、音になる人の心の状態そのものを全く明確にするものではないということ。

エ 音楽を聴くということについて、大脳と神経系の関係からの説明は、音が聴こえるという状態の一面さえも明白にするものではないということ。

オ 音楽を聴くということについて、人体の音の伝達の仕組みの科学的な説明は、聴くという経験の意味を少しも明らかにするものではないということ。

問五 傍線部(d)の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 46 にマークしなさい。

ア 虫の音に感じ入るような状態を「一体化」として表現してしまうと、知覚する私とその対象との関係が曖昧にされることになって、私

が虫の音として世界に響いているという事実を明確にできなくなってしまふということ。  
イ 星空に心奪われているような状況を「我を忘れた」と表現してしまうと、主語述語の世界観を受け入れることになって、星空を見ている私という経験の本質が見失われてしまふということ。

ウ 鳴く虫に心を寄せているような状態を「一体感」として表現してしまうと、知覚の主体と知覚対象としての世界の分裂を看過することになって、私が虫の音としてあるという事態の把握を困難にしてしまふということ。

エ 星空に魅了されるような状況を「一体化」と表現してしまふと、知覚する私とその対象という区別を前提とすることになって、私が星空として存在するという経験の実感から遠ざかってしまふということ。

オ 虫たちの大合唱に身をゆだねているような状態を「一体感」として表現してしまうと、主客未分化の世界のありようが否定されることになって、虫として鳴っている主体である私が見失われてしまふということ。

問六 傍線部(e)の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 47 にマークしなさい。

- ア 私が視覚を通じて理解していることのみが純粹な経験と呼び得るのに、その経験を対象として知覚することはできないということ。  
イ 私が見ることを通じて知り得ること全ては世界内の存在であるのに、その世界のうちに私を見出すことはできないということ。  
ウ 私が身をもって知覚していることだけが経験の名に値するのに、その知覚を行う主体としての私は世界に埋没してしまふということ。  
エ 私が見て知覚しているものこそが私にとっての世界の全てであるのに、その世界を見ている私を知覚することはできないということ。  
オ 私が世界と一体化したときには全宇宙を見晴らす眼を獲得しているのに、その視点を確認しようとする途端に世界から遠ざかってしまふということ。

問七 問題文の内容としてふさわしいものを、次のア～カの中から二つ選び、解答欄 48 に二つマークしなさい。

- ア 客観的物理的な世界の実在を経験に先立つことと認めることによって人は主語述語の世界観を確立することができるが、その代わりに夢中に何かに没入することが難しくなる。  
イ ヘッドフォンから流れる大音量に身を任せて聴き入っている状態について、科学的説明によって表すことを受け入れると、こうした純粹な経験の不思議を忘却してしまう。  
ウ 夏の終わりを惜しむかのような樹上の蝉の鳴き声が、わが季節の到来を楽しむかのような地にある秋の虫たちの音へと変わる時間に身をゆだねていると、自然と主客の転倒の構図を実感することができ、その錯覚の中で我を見失い、部屋に居ながら宇宙に飛び出すような錯覚を味わうことができる。  
エ 虫たちの大合唱を聴きつつ、満天の星々を眺めるような状況であれば、知覚の対象としての私をも忘れて、宇宙にあつて地球を俯瞰する宇宙旅行のような境地へ達してしまふ。  
オ 大峯の俳句は、虫たちの合唱を聴くことで虫の音として私が鳴っているように感じる逆転の構図を二句の「浮く」という言葉で象徴的に表現するが、「地球かな」という句の結びは知覚するものが知覚されるという更なる逆転をイメージさせ、存在の無限へと思考を開かせるのである。

カ 大峯の俳句は、星空と虫の音に心奪われ我を忘れた純粹な経験が示されるとともに、その経験をする私の世界を見晴らす視点を示す「地球かな」という結句が置かれることによって、私とは何かという解き得ない謎へと導くのである。